

柴田人、川との暮らしを語る

柴田町を流れる阿武隈川、白石川、五間堀の三つの川は、柴田の大地とこの地に生きる人々を潤してきました。時には猛威を奮いながらも、常に暮らしたくともにあった川。今回、この三河川とともに育った人々が、川との思い出、そして川にこめた明日への思いを語り合いました。

日下 ◆ 本日はお忙しい中、座談会にお集まりいただき、ありがとうございます。柴田には三つの川が流れ、川が人々に多くの恵みをもたらしてきました。皆様に、今までの川との思い出や、これからの川との共存への思いなど、大いに語っていただきたいと思えます。

本日はよろしくお願いたします。

町長 ◆ 私自身、柴田の川という事で一番に思い出すのは白石川の水質の良さでしょうか。

川は昔から生活の一部であり、子どもたちにとっては格好の遊び場でもありました。そして年齢を重ねた今、改めて感じるのは景観の美しさです。私はまだ青年だった頃、蔵王を遠くに眺めながら自転車で堤防を走り抜けていたものでした。白石川からの美しい眺めを目にするたびに、この風景を大切にしなければいけないと感じていました。

斎藤(勝) ◆ 私は五間堀の近くで生まれました。五間堀は、



平成14年7月より、柴田町町長に就任。町民と一体となり、積極的に町づくりへ貢献する。

柴田町長
滝口 茂
昭和26年5月11日生。
船岡中央一丁目在住。

和四十三年に河川改修が行われるまで、川幅一〇メートルほどの蛇行した川だったので、堤防は生活道路として利用され、人々がぞろぞろと歩いていたのを覚えています。牛車を引きながら堤防を行き交う人々の姿は、いまでも懐かしく思い出されますね。雨が降ってぬかるんだ土手に牛車を通ると、その後にはわだちができるんです。それを埋めようと、地域の人々が川原から石を拾い集め、溝に埋めて堤防を平らにしていたものでした。

忘れられない、あの川の光景。

斎藤(幸) ◆ 私は阿武隈川の傍で生まれました。阿武隈川といえば、交通の要衝だったことで有名です。私が小学生の頃は車もなく、交通手段といえば、まず船という時代でしたから、川にはいつも船が行き交っていましたね。終着の清水船場に向け、小山船場から帆掛け舟がゆつくりと登ってくる光景は一枚の絵画のように美しく、よく絵描きの方が来ていたのを覚えてます。あの光景を二度と目にできないかと思うと少し寂しい気もしますね。



思い出からまちづくりまで、川について熱く語り合われた

また、昭和二十年当時の阿武隈川は現在の二倍の水量があったでしょう。いかだ流しも非常に盛んでしたね。五〇メートル程もあるいかだを男衆が前後で先導していました。その勇壮な姿に、私自身、幼いながらも憧れたものでした。

日下 ◆ 仙台城築城の際、丸森

柴田人、川との暮らしを語る 座談会 Table Talk

から資材を運ぶのに阿武隈川が利用されたという歴史が残っていますね。

安藤 ◆ 私の思い出の多くは白石川にありますね。白石川は大正十二年に改修工事が完了したわけですが、改修以前の旧河道古川には、私が幼い頃はプールがわりに遊んでいた場所もありました。白石川の特徴のひとつに、流れが非常に急な川であることがあげられると思います。そのため水の入れ替えが早く水質が良く、川に水を汲みに行ってはお茶を沸かし、米をとぐなど、生活用水として大変重宝していました。



水質の明瞭さは随一の白石川。その魅力を大いに語る。

安藤 九平治さん
昭和6年・7月1日生。
本船迫在住。

生命を育む美しい川は、子どもたちの成長の場。

斎藤(勝) ◆ 以前の五間堀は、蛇行しているために淀みが多く、そこに多くの魚が集まってきたものでした。子どもたちはナマズやウナギなどの魚を大量に捕っていました。黒シジミなど、現在ではあまり目にする事ができなくなった生物も数多く生息していたように思います。

斎藤(幸) ◆ そうですね。阿武隈川周辺の地域の人々も、

和四十年頃まではウナギやナマズ、コイやフナなど川魚を捕って生活している家が多くありました。カエルを餌に、竹一本でよく釣りをしたものです。阿武隈川で捕った魚は重要なタンパク源であり、釣れた魚を家に持って帰ると、家族には大変喜ばれたものでした。あの時代のことを思うと、本当に懐かしいですね。

安藤 ◆ あの頃は本当にたくさん魚が捕れましたね。私も釣った魚を持ち帰り、家族にとっても喜ばれた記憶があります。